

うしく里山の会 広報誌

# さとやま

No. 102

2011年8月号

NPO法人 うしく里山の会

事務局 〒300-1212 茨城県牛久市結束町489-1  
(牛久自然観察の森内)

TEL 029-874-6600 FAX 029-874-6812

E-mail u\_satoyama@infoseek.jp

HP <http://u-satoyama.web.infoseek.co.jp/>



ハイケボタル観察会に参加した子ども達

## 自然林と谷津田と 水辺の生態系

自然観察出前講座

石神 良三

写真は、去る七月十五日（金）に実施した、向台小学校五年生親子対象の「ハイケボタルの成虫」観察会の一コマです。後方は一万年以上も昔から人々が暮らしていた台地の斜面林。手前は斜面林からの湧き水で四百年も前から米作りを続けてきた田んぼ。田んぼと右手奥に流れる水湿地がハイケボタルの生息地です。

今回、私たちはホタル成虫の繁殖生態と併せて、もう一つの視点を設定しました。それは四百年にも及ぶ「自然林と谷津田と水辺がつくりだした生態系」を実感しあうことです。

子ども達が集合してきた七時前の夕焼け空はまだ明るく、影絵のように飛び交う動物を観察することができました。子ども達は口々にその名前を呼んでいましたが、その姿がたちからツバメとトンボ、カナブン、ガの仲間を観察できました。しばらくしてツバメとは違う飛び方をする動物を発見し話題騒然。出前講師仲間の「あれはアブラコウモリだよ」の一言に驚きの声があがる。コウモリは夜行性という解説に「どうしてここに飛んでいるの？」という子どもからの質問。そこで野生動物の食物連鎖について話してあげる。

田んぼや水湿地で発生するガガンボやユスリカ、ウンカを食べるためにツバメ、オニヤンマ、コウモリが飛び交っていることに納得の様子。天敵ということばも子どもから出てきた。

つづけて、これから観察するハイケボタルの天敵について話し合う。水中での幼虫の天敵はトンボの幼虫であるヤゴ。成虫になつてからはクモが強力な天敵になることを話してあげる。生息地での産卵数からの成虫発生率は、概算でおよそ一％程度であることを知らせると複雑な表情をする子が多く見られた。

食う 食われるのバランスを支えられている生きものの世界。生態系の一端を実感できたように思う。

これからも生態系の視点を大切にしたい出前講座を展開していきたいと考えている。



うしく里山の会には

個性豊かなプロジェクトが

たくさん活動しています。

先月はどんなことがあったでしょうか？

それでは紹介しましょう！

# プロジェクト活動報告

## 植物調査を通じて知らされたこと

七月九日（土）、定例のモニタリング1000里地調査における植物相調査を実施しました。

当日は晴天で暑い日。今月から開始時刻を三十分早め午前八時三十分とし、夏時間の活動としました。本格的な夏場の活動なので暑さ対策、熱中症予防等は欠かせません。又、蚊などの防虫対策も必要で、私は作業開始前にスプレーで体に防虫液を吹き掛けたり、長袖シャツ・麦わら帽子の真夏対応スタイルで臨みました。

参加者は三名のみでしたが、何時ものやり方、ペースでコースを巡り午後一時頃無事終了。蕾、開花、結実状態の草本植物を延べ三八〇種ほどリストアップ。二月以降、記録するリストのページ数が毎月増えています。一方、種数の減少要因もあります。特に今月はそれが顕著でした。二日前の七日に城中町の町内一斉除草作業が実施され、道端、道路際の斜面林下、空地などが刈払機等できれいに草刈りされていたのです。県による森林湖沼環境税の導入の故か、ここ一年、二年、山林や斜面林の除草・間伐管理がかなり良くなされています。そのため確認できる植物の種が減ってしまったのです。それでも雑草・野草の方も一部の種は刈られても踏まれても薬剤を散布されても姿・形を小さくしたり、地下茎で生き延びたりして限られた期間で一刻も早く種を残そうとしています。

夏の調査活動は苦勞も多いのですがいろいろな楽しさもあります。ナワシロイチゴが赤く熟し、食べられます。樹木の木陰の有難さ（気温が2度は下が



里山自然観察隊

平塚 芳雄

る）を実感します。林間、樹間を抜けてくる涼しい風の心地よさ。汗がひきます。顔を挙げると積乱雲が張りだし大きく広がった青空。ホトトギス（特許許可局）コジユケイ（ちよっとこい）、ウグイス（法、法華経）など野鳥の声も聞こえます。

私が植物観察会などに参加するようになって六年近くになります。観察会や調査活動を通じて関心をもつようになり考えるようになったことがあります。人間と自然との関わり。植物がなければ人間を含む動物は生きてはいけない、生態系・食物連鎖のこと。人間は例外として自然界の生物はともに生涯を送れるものは非常に少ない。生物多様性の重大性、自然環境の保全等々です。

里山歩き・植物観察を楽しむとともに、これらのごとに関心をもち、自ら関わっていかねばならないと思いで、雑草・野草・作物などごく身近な植物への関心、関わりからアプローチしていくことを考えています。



調査コース(耕作放棄田)に咲く  
ジョウロウスゲ





親子農業体験講座  
一般参加者 鈴木安龍

梅を採りました

日本で春を迎えたのは今年で四回目になります。長い冬から春の訪れを一番最初に教えてくれるのは、まだ冷たい空気の中にほんのり漂う梅の香りでした。春が来たことの嬉しさ、日本の生き生きとした自然の恵みを感じとても幸せになります。しかし、今年は東日本大震災で、梅を採る時にやっと季節の流れを感じました。春はいつの間にか終わり、雨が降ってジメジメ気持ち悪い、晴れ間が出たら蒸し暑い、苦手な季節になっていました。

ただ、農業体験の仲間たちと一緒に梅の木に向き合って、梅を採ってたら、すごく楽しくなりました。子供たちの無邪気な笑顔、仲間たちの暖かい心変わって行くけれど、いつも見守ってくれる自然。本当に凄く安らぎを感じ、生きる力を沢山貰って帰ってきました。食べきれないくらい多い梅と一緒に。(笑)

梅を採ったのは初めてだったので、貰った梅をどうしようかと少し悩みました。梅シロップがいいかな?それとも、梅酒がいいかな?と。しかし、友達にお裾分け出来るくらい量があったので(笑)両方作りました。まだ、砂糖と梅が完全に溶け込んでないけれど、これからどんな味になってくるのか凄く楽しみです。自分たちが採って作ったので、多分一番おいしいですよ。(笑)

ここで、ちょっと話は戻りますが、確かに震災はとんでもなく沢山の被害を残したけれど、日本人はとつてもよくやっていると



梅の実、いっぱい採れたよ!

今年の春は失ったかもしれないけど、日本だけではなく世界中を一つにさせて、助け合い、徐々に取り戻して行くのを見てみると、これもまた凄い事だなど思います。皆の愛が実になってお互い助け合う姿。心が温まりますね。

まだ、復興への皆の思いが一つになれず、なかなか溶け込んでいけないことも感じますが、きつと見事に乗り越えられると信じています。これからどんな日本になって行くのか楽しみです。



なんだが、梅採りで感じた事と似てるような気がしますね。(笑) ささやかな生活の中、人生の哲学あり!と言いますか。(笑)

すごく、楽しい体験でした。ありがとうございました。

これからもよろしくお願ひします。  
.....(本当に楽しかった梅採り)  
.....(来年も楽しみます。皆さんファイト)  
編集担当から

.....の場所に韓国語の表示がありましたがつトの関係で削除させて頂きました。



巨木リサーチ2事業報告  
牛久市役所緑化推進課 柳下広司

牛久市協働事業刊行物編集委員会の  
事務局を担当して

平成十七年度に、うしく里山の会渡辺泰さんより、市内の巨樹の調査を行いたいとの御相談を受けたことが始まりでした。当時、緑化推進課では「市民の木」指定から十数年が経過し、今後の取り組みが課題の一つとされてきました。そこで、まずは「市民の木」の調査から始めるといふこの事業に、緑化推進課でも協力をさせていただきました。

緑化推進課では、事業を円滑に進めるために、所有者・管理者への連絡・調整を中心に業務を進めました。平成十八年度の樹木調査に始まり、資料展、巨木探訪会、そして『牛久の巨樹』の刊行と、そのたびに樹木の関係者に意向を確認する作業を行ってきたので、巨木リサーチの皆さんには、市の業務はなんと時間がかかるのかと思われることもたびたびあったのではないのでしょうか。

『牛久の巨樹』編集作業は、解説文の作成から始められ約一年間に及ぶものとなりました。編集委員会では、解説文のみならず、写真の使い方や、現地までの案内文について、読み手の立場に立った議論が毎回重ねられました。事務局では、行政の立場から、内容の客観性、公平性、個人情報保護の扱いなどを中心に内容を確認し、その過程で表現を変更したり、記載そのものを削除させていたこともありました。編集委員会での議論をうかがいながら、基本的には巨木リサーチ2の皆さんが作成した内容を変えることなく、市民の目



牛久の巨樹」の表紙 戸塚

線で作られた冊子を目指しました。  
 完成した『牛久の巨樹』では六十六本の巨木・希少木を紹介することができました。潜在自然植生であるスタジイが多いことのほかに、屋敷林で多く見られるケヤキが多いことから農耕を中心としてきた牛久市の特徴が表れていると考えます。全国的な規模でのものはありませんが、人の暮らしの空間で長年生きてきた樹木は、やはり地域で大切にされてきた樹木に違いはないと考えます。『牛久の巨樹』が牛久の樹木や自然に対する関心を高める大きなきっかけとなると考えています。

なお、『牛久の巨樹』は、樹木の所有者・管理者・各学校・図書館、行政区等に配布しました。一般向けには市役所緑化推進課で一部千二百円で販売しております。また、『牛久市協働事業巨木リサーチ事業報告書』は、図書館・生涯学習センター等に配布しました。



### アヤマ園 これからが正念場

あやめ受託事業報告  
坂 弘毅

今年の花期は不安でいっぱいであった。震災で液状化現象が発生した圃場の生育が極めて悪いこと、更にはつぼみを付けた株の生育も良くない、更には昨年購入した株も元気がないと云ったいくつかの不安材料が重なった。



六月に入り、毎日が不安の連続であった。しかし、中旬になると急激に蕾の数が増し、第三週には満開を迎えた。あつという間に開花を迎えたという感じであった。

花の数も例年とさほど遜色がなく、来園者からは「きれいに咲きましたね」「昨年よりもきれいですね」などなど数多くの激励をいただいた。「やきもきしつぱなしの今年の花期」であったが、何とか乗り切ることができたように思う。

さて、今年は株分けの年、猛暑の夏と予報が出ているが、八月いっぱい株分けを完了させなくてはならない。この時機を逸してしまうと、細根が活着せず、株の生育が大きく遅れてしまうからである。

今年の株分けは単なる株分けではなく、いくつかの実験を考えている。その実験とは、

- 連作障害の実験
- 土壌改良の実験
- 株分け周期の実験

(三年 二年に)、

鉄二価イオンとゼオライトによる植物活性化実験などなど、

このように、初めての大がかりな実験を敢行する。幸いにも、病害虫による株の衰退などはほとんどなく、牛久方式の管理の方法を構築することによって、アヤマ園の黄金期を迎えることができるのではないかと考えている。そして、拡張された一〇〇〇平米の圃場を埋め尽くすことも今年のテーマである。

そして、

猛暑の夏の作業を無事乗り切るこ  
とができ  
れば、実験の  
成果が表れ  
る次年度の  
開花が大い  
に期待され  
るところで  
ある。



株分けされた田んぼ

坂 11.7.25





雑木林応援隊

竹越 直美

梅仕事そして下草刈り

梅林の梅の実を採りました。森からの「採ってもいいですよ」の声を待って。棒で叩いてポトポトポトポト。青い梅の実、拾って拾ってこんなに持ち帰ってどうするのというくらい。まずは梅酒。梅酒は簡単、カビる心配がないから。でも砂糖の量は慎重に。あまり酸っぱいと人気がない。甘過ぎるとカロリーが気になる。一ハリットルの



狭いところは刈払い機での除草作業

ホワイトリカーに七〇〇グラムの砂糖が丁度いい。肝心の梅の実は一キログラム。

夏が過ぎて秋が過ぎて寒い冬。そろそろ飲めるかな。こたつの中でオンザロックもいけれど何と言ってもお湯割り。冷え性の方お薦めです。身体がぽかぽか温まるのがわかります。

それから梅ジュース。今年一度凍らせてから作りました。組織が壊れて早く作れるとの事。砂糖をいれたら不思議不思議どんと梅のジュースが上がって来て今これを書いてるテーブルの上でそろそろ飲み頃ですよ飲んでみてと言っているよう。ただの水でもいいけれどシユワターと炭酸水だとグツと賢沢な気分。最後は梅干し。

これはもう二十年近く作り続けてこの季節のお楽しみ。ても容器もないし塩も砂糖も摂り過ぎは良くないよなと自分を納得させ横目で通り過ぎる。

応援隊は五月から六月

にかけて二回の梅林の下草刈りをしました。ここを訪れる方々が気持ち良く過ごせますように。二台のサンダーバードと刈り払い機と熊手が活躍。あの広い梅林の草たちがすっきりと刈り込まれて行きます。今年新しい仲間を迎えての作業。昼、炭小屋に戻って来たメンバーは皆汗だく。大鍋を囲んでの昼食の時間はほっとする大事な時間です。

第一駐車場から炭小屋、森の畑そしてネイチャーセンターへと通ずる梅林。もう何回通ったでしょう。花の季節は上を向きそして実の季節も上を向き。牛久駅

前から移植されて来た梅の木たち。今年もいっばい楽しませてもらいました。ありがとう。



広いところはサンダーバードでの除草作業

私とうしく里山の会の関わり

第二回目

代表理事 坂弘毅

「里山」と云う言葉の響きに魅せられて

「雑木林と茅葺農家のある風景」、これがまさに「里山」の情景であろう。その里山という言葉の響きに魅せられて早や四十年が経過した。縄文時代より、人間が適度に関わってきた二次自然「里山」は動植物と人間の共生で出来上がった世界でも類を見ない貴重な自然である。

里山の維持には一定のルールがあり、その決まり事を継承したからこそ、美しい日本の原風景があったのである。しかし、現代社会を取り巻く大きな課題、「高齢化と後継者不足（農業者）」は里山の荒廃を更に深刻なものとしている。

里山という言葉がマスメディアによって認知されたのはそれほど古いものではないが、今を遡ること二七年前、江戸時代の一七三九年（宝暦九年）寺町兵右衛門が著した「木曾山雑話」の中には「村里近き山を指して里山と申し候」と記述されている。

これが里山の定義となったと思われる。「ムラ」（集落）、「ノラ」（田畑）、「ヤマ」（雑木林）であり、日本の原風景となる「里山」はここから生まれたのだろうか。

私に里山の魅力を取り付かせたのは、山男の時代であった。二代後半から始めた登山は日本百名山

の七、%を踏破した。その時々、山の裾に広がる里の景観は鮮烈で、北アルプスの安曇野や中央アルプスの木曽路、南アルプスの甲斐路、更には富士山の忍野村などなど、単なる景観ではなく、自然と人の共生によって作り上げられた独特の美しい自然景観であった。これはまさに前述の寺町兵右衛門のくだりと同じだ。そして、その鮮烈な印象が、更に古い時代の記憶を想起させた。

昭和二〇年、終戦間際に、茨城県の東北に疎開していた頃の記憶を蘇らせたのである。茅葺の農家の一室。早朝、小鳥のさえずりに目を覚まし、膝下までの短い浴衣を着て、田んぼのあぜ道を裸足で駆け回ったのを思い出したのである。そして、夜のと



ばりが下りる頃、ゲンジボタルが障子の隙間から飛び込んでくるというまさに日本の原風景の中の生活であった。その幼少期の記憶と、成人してから記憶が重なり、「里」や「里山」という言葉の響きが



更に美しい情景となつて私を包み込んでいったように思う。今、荒廃して見るに堪えない里山を見るにつれ、もう一度、「里山」という言葉に耐えられるような美しい景観（美林）に戻りたいと考えるのは私一人だけであろうか。



### 小野川探検隊に参加して

佐藤 輝雄

七月二十三日、小野川探検隊のスタッフとして参加する機会があった。

小野川探検隊とは牛久市内を流れる「小野川」流域の市町村（つくば市・牛久市・阿見町・竜ヶ崎市・稲敷市・美浦村）の子どもたち（小学生）を対象に小野川周辺の自然・歴史・文化などに触れる体験を通して水質浄化を目的に、各地区の行政やうしく里山の会等を含む三十七団体で活動している。

今回は、美浦村「陸平貝塚公園」を会場に、貝塚見学・竹細工作り・貝塚の貝の名前当て・自然の遊びなどをを行うもので、スタッフ含めて約一〇〇名の参加となった。

陸平貝塚は全国でも屈指の規模を誇る縄文時代の貝塚で、明治時代からいまだに発掘が続けられているほど大きさをもつ。一度は見てみたい場所でもある。

広場で行われた竹細工について紹介したい。一つの目的は竹で茶碗・箸をつくり昼に豚汁を食べることだ。近くの竹林から直径十五cm程の孟宗竹を切り出すのはスタッフの仕事として、切り倒した竹を広場に運ぶのは子どもたちである。

六組のグループに分かれて、早速竹切りの作業を始める。五年生の子どもたちが中心となつていうが兄弟・姉妹がいて幼稚園児の小さい子どもたちも多かったです。

我々スタッフがアドバイザーをしながら「のこぎり」で竹を切るが、上手な子もいればオッカナビックリに作業する子もいる。また、ナタで割りばしを作るときに、竹の下側をもつて上からナタを当てている。見ていてハラハラする。しばらくすると結構上手に作品が完成した。

その後一時間ほど、残った竹で自分の好きなものを自由に作らせた。面白いほどに夢中になつて作業をする親子等の姿がなんともいえない。むしろ親たちの方が必死に取り組んでいる。花瓶・ひしやくや大人にはわからないような作品を、自分の夢を描きながらもくもくと作り込む。瞬間に竹のほとんどが使われてなくなつてしまった。

終わった後、隊長が工作の感想をきくと、大半の子どもたちは大きな竹を切るのははじめてのこと。のこぎりを使ったのも初めての子どももいた。私たちが子どもの頃は当たり前前のことだったが、

荒れた竹林があつても自分の近くに材料がないことや刃物を使うことを親が許さないことなどがあると思う。



スタッフの指導を受けながら竹を切る子ども達





結束町みどりの保全区

エコアップ作戦

齊藤 孝

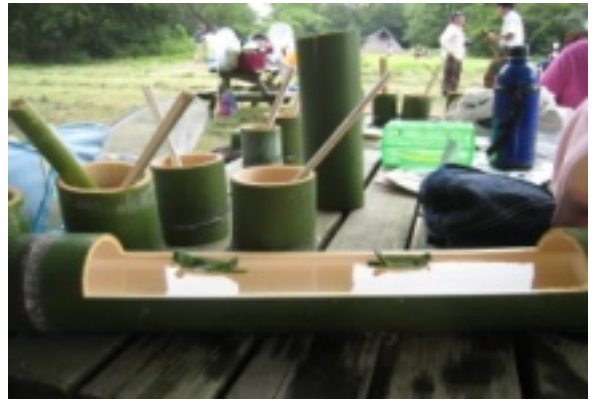
八月はうしく里山の会全体事業

里山保全ボランティア

「結束町みどりの保全区エコアップ作戦」は実施されません。

その後、昆虫を捕まえていろいろと調査するなど楽しく過ごして解散になった。牛久自然観察の森でも同じような行事が行われるが、私たちはこのような体験学習を多く企画することが必要と再認識させられた。

間もなく、スタッフが大きな鍋でつくった豚汁が配られた。豚汁は熱いのにお椀は熱くない。子どもたちは不思議がっていた。それぞれ持参した弁当とともに舌鼓をうつ。中には四杯もお代わりするツワモノもいた。



子どもたちが作ったお椀と箸 手前には竹の中に水を入れ笹舟が浮かんでいた



牛久自然観察の森だより

チーフコーディネーター 齊藤 孝

来たる十月十三日、十四日、牛久自然観察の森を会場に「全国自然観察の森運営協議会」が開催されることになりました。

この協議会は、全国に十力所ある自然観察の森関係者約三十名が年に一度集まって課題協議をしたり現地視察を行うものです。会場は全国の自然観察の森を年に一カ所ずつ持ち回りで使用しますので、牛久での開催は十年ぶりとなります。前回（十年前）は初日の会議を観察の森で行い、交流会と宿泊は荳崎のレイクサイドを使用しました。

今回は会議が牛久市役所で緑化推進課職員が司会を担当、交流会はシャトーでパーベキュー、現地視察は観察の森で里山の会職員が担当という予定になっています。

まだ二カ月ほど先の予定ですが、観察の森での現地視察にご協力いただける方がいましたら、森職員まで一声お掛け下さい。一緒にガイドを行います。

ちなみに、当日全国から集まるメンバーは、各自然観察の森の自然解説員（レンジャー）、行政担当者、環境省担当者等です。また、二日目の協議会終了後はオプシヨンとして、森林総研や筑波宇宙センターなどの案内もする予定です。

牛久自然観察の森は全国で最も利用者数の多い観察の森として、他施設から本会の運営ノウハウに熱い注目が寄せられています。協議会を通じて、日頃の事業の成果をしっかり発表していきたいと思えますので、皆様のご協力を宜しくお願いします。

身近な樹木 No. 5 ネムノキ



本州・四国・九州・琉球に生育するマメ科ネムノキ属の落葉高木。県内では全域に広く自生する。葉は十五〜三十対の小葉からなる複葉で、夜は閉じて垂れ下がる。これが名前の由来とされている。花は十〜二十花が頭状に集まり、枝先に円錐花序をつくる。梅雨の終わりから盛夏にかけて咲く花は薄紅色をしていて繊細で美しい。写真の長く伸びた糸状のものは雄しべで、独特の花弁を持つ多くのマメの花と違う印象がある。おしべが花を構成している点は、オジギソウなどと似ている。果実は豆果で扁平、褐色、長さ十〜十五cm、中には小さな種子が十〜十八個入っている。鞘は冬になっても開かず、果実全体が風に吹き飛ばされる仕組みになっているのではないかと思われる。

ネムノキは二次林に生育する。斜面下部などの土壌のたまる湿った場所を好み、乾燥地には生育しない。市内では雑木林や斜面林の他、公園などに見みられる。三日月橋の袂にあるネムノキは毎年美しい花を咲かせていたが、今年の原因不明であるが枯れてしまいとても残念である。その代り、稲荷川東岸の斜面林に何本があり、六月三十日撮影に行ったときは、まだ咲き始めであったが、これから美しい花が見られそうである。



雄しべが細長い繊細な花 11.6.30

(戸塚昌宏)

## 2011年8月 NPO法人うしく里山の会 活動カレンダー

日	月	火	水	木	金	土
	1 (休園日) アヤマ園(受) 6:30アヤマ園P	2 森の畑 9:30畑	3	4 アヤマ園(受) 6:30アヤマ園P	5 クラブプロジェクト 13:00NC	6 親子農業体験講座 9:00畑
7	8 (休園日) アヤマ園(受) 6:30アヤマ園P	9 森の畑 9:30畑	10 巨木リサーチ2(特) 8:30森ランティアC	11 アヤマ園(受) 6:30アヤマ園P	12	13 里山自然観察隊 (モリノグ 里地調査) 8:30得月院P  (会報等原稿〆切)
14 雑木林応援隊 9:00ムジナ	15 (休園日) アヤマ園(受) 6:30アヤマ園P	16	17	18 アヤマ園(受) 6:30アヤマ園P	19 クラブプロジェクト 13:00NC	20 親子農業体験講座 9:00畑
21 運営委員会9:00NC 理事会11:00NC	22 (休園日) アヤマ園(受) 6:30アヤマ園P	23 森の畑 9:30畑	24	25 アヤマ園(受) 6:30アヤマ園P	26	27 チーム「街路樹20(受) 13:00市街ランティアC (交流会) 会報発送 13:00NC
28 雑木林応援隊 9:00炭屋 (草木染め教室)	29 (休園日) アヤマ園(受) 6:30アヤマ園P	30 森の畑 9:30畑	31			

活動日は天候等により変更となる場合がありますので、最新情報はホームページ(トップページのお知らせ欄)をご確認ください。

## 【凡例】

森: 牛久自然観察の森  
NC: 牛久自然観察の森ネイチャーセンター  
P: 牛久自然観察の森駐車場  
炭小屋: 牛久自然観察の森駐車場の炭小屋  
畑: 牛久自然観察の森駐車場の畑  
コジユケイ: 牛久自然観察の森コジユケイの林  
観察舎畑: 牛久自然観察の森内観察舎前の畑

ムジナ: 結東町の雑木林(通称ムジナの里)

市役所: 牛久市役所本庁舎

ボランティア: 牛久市ボランティア

市民活動センター

中央生涯C: 牛久市中央生涯学習センター

アヤマ園: 三日月橋観光アヤマ園

(休園日): 牛久自然観察の森休園日

(受): 受給事業

(特): 特別事業



## 編集後記

学校が夏休みに入ってから、NHKのラジオ番組で「こども科学電話相談」を放送している。子どもたちが疑問に思うことを電話で相談して専門の先生たちが答えるものである。私は時間があるとこの放送を面白く聞いている。私たち大人が思いもよらないことの質問が多くあると、考えさせられることや勉強になることが多い。(前にもこの欄で書いたことがあると思う)。

今も会報を編集しながらこの番組を聞いていたら、「ヘビの胴体と尻尾の区別はどうするのですか?」「ヘビはどうして長いのですか?」「ホタルはどうして光るのですか?」・・・このような質問にわかり易く答える先生たちも大変なものだろう。目の前で図などを示しながら答えるのは比較的簡単だが、口だけで説明するのは至難の業のことと話していた。

ちなみに「ヘビの胴体と尻尾の区別は?」ヘビの腹側の後方に排泄と生殖を行う「排泄孔」があり、それより前が胴体、後ろが尻尾に区別するようだ。別な判断として全てではないが、腹側の鱗が一枚づつ並んでいる部分が胴体で、中央で分かれて二枚づつ並んでいるのが尻尾だそうだった。皆さんも機会があったらラジオに耳を傾けたらと思う。

七月二十三日から、夏休み・つくばちびっこ博士が開催され、森林総合研究所でも「森の展示ルーム」がオープンになり、今年もうしく里山の会が説明員を担当することになった。私も今年一回目の説明員を担当した。今年のテーマは、小笠原の世界自然遺産にも登録されたこともあって、「在来種」が「外来種」によって島の固有種が絶滅危惧に遭っていることなどが展示されている。

機会があったらみなさんは是非来てみてください。会員の皆さんが必死に説明している姿も見られます。

佐藤輝雄記

## 広報委員会からのお知らせ

次号2011年9月号の発送は8月27日(土)午後1時からです。お手伝いいただける方はネーチャーセンターまでお越しください。(尚、発送日・時間につきましては都合により変更する場合がありますので事前に御確認いただければと思います)よろしく願いいたします。